

日光は裏が面白い。誰もが知っている観光客で賑やかな東照宮。その背後には、起伏に富んだ美しい自然が広がり、海外からの来訪者がその良さを発見し建てたいいくつかの住まいがある。そこには我々があまり知らない暮らしが静かに営まれている。妻のネットワーキを通じて、そんなコミュニティの一端に触れる機会に恵まれた。彼らが仲間とシェア

する一軒家の通称「赤門」や、あのチェコ出身の建築家アントニン・レーモンド<sup>\*1</sup>（1888〜1976）が残した旧イタリア大使館日光別邸（1928）、トレッドソン別邸（1930）など、今も暮らしが営まれる一連の住まいである。

レーモンドは1919年、帝国ホテル設計の助手としてライトと共に来日した。その後1922年に独立し、レーモンド事務所を開設。ライトの影響が余りに強烈であったため、そこから抜け出すのに苦労したと言われている。その後ライ



写真86-1 東照宮背後の墓陵



写真86-2 風神像

\*1  
Antonin Raymond  
(1888〜1976)  
：チェコ出身の建築家でライトのもとで学び、帝国ホテル建設を機に来日。その後日本に留まり、多くのモダニズム建築を残すとともに、日本人建築家に大きな影響を与えた



写真86-3 旧イタリア大使館日光別邸



写真86-4 旧トレッドソン別邸外観

ディテールなどは、ライト建築との決別を意味する新境地とされている。前川國男<sup>\*2</sup>、吉村順三<sup>\*3</sup>などの建築家がレーモンド事務所

所で学ぶなど、その後も日本人建築家に大きな影響を与えた。一方、平屋のトレッドソン別邸は80年経った今も老夫婦の別荘として使われ、静かな時を刻んでいる。以前にこの別荘を訪ねる機会を得た。暖炉を中心にくつたりとした自然の材料で囲まれた居間はもとより、その前面に広がる苔むした庭にはせせらぎが流れ、高く育った樹木の間にその心地よい水音が響く。そうした日光の樹林地に佇む住まい。庇に向かって反りがあるように見える屋根の形状が美しく、大変印象的であった。



写真86-5 旧トレッドソン別邸内観

\*2  
前川國男  
(1905〜1986)  
：モダニズム建築の旗手として、第二次世界大戦後の日本建築界をリードした建築家

\*3  
吉村順三  
(1908〜1997)  
：建築における日本の伝統とモダニズムの融合を図った指導的建築家